



2月1日を迎えると、ミャンマーで軍事クーデターが起きて4年になる。ミャンマーは「アジア最後のフロンティア」と呼ばれ、日本の民間企業が開発したティラワ工業団地が完成してから間もなく10年を迎える。安価な労働力、消費市場の拡大を背景に、日系企業は相次いで進出を果たした。2019年10月、第1の都市であるヤンゴン市内のホテルで開催された取引先の開所式に出席した。現地の商工会議所会頭から、「ミャンマーへの進出を歓迎するとともに、ビジネスの成功を祈る」との祝辞を受けたことを覚えている。

その後、20年7月にミャンマー国内でも新型コロナウイルスの感染が拡大した。翌年2月には軍事

## ミャンマーからの移民

# タイの労働力不足救う

クーデターが発生し、日本からの投資意欲は大きく低下した。開所式に出席した取引先も、23年に現地パートナーとの関係を解消した。現在も国軍と民主派の内戦は続いており、ミャンマーの将来が見えてこない。

タイの首都バンコクの早朝6時、市内を散歩しているとスクンビット通りの建設現場に向かうため、大勢のミャンマー人が乗り合いバスから降りてくる。街を見渡せば、道路清掃員にもミャンマー人が目立つ。高齢化が進むタイでは、ブルーワーカーの確保を外国人労働者に依存しているのが実状だ。

タイ外国人労働者管理部によると、24年11月時点のタイで働くミャンマー人は228万人で、東南

アジア諸国連合(ASEAN)で働くミャンマー人の約7割を占める。タイでは新型コロナウイルス収束後、鉄道や空港などのインフラ整備が急ピッチで進み、バンコク市内ではショッピングモール、コンドミニアムホテルの建設ラッシュを迎えている。閉鎖していた飲食店も再開し、慢性的な労働力不足に陥



シュエダゴン・パゴダ＝ミャンマー・ヤンゴン

っているが、皮肉にもミャンマー国軍が徴兵制を導入したことや長引く内戦によって、タイに逃れてきた移民が労働力不足を補っている。

日系の焼き肉店で働くジーさんは「6年前にタイに出稼ぎに来た。家族をミャンマーに残したままで心配だが、今の国内事情を考えると帰れる状況ではない。バンコクはミャンマー人も多く不自由は感じない」と話した。

私も19年以降、ミャンマー人ならずとも憧れる聖地であり、黄金の仏塔として知られる寺院「シュエダゴン・パゴダ」を訪れられずにいる。ミャンマーが国際社会から孤立することなく、観光やビジネスなどで渡航が再開することを願うとともに、いつの日か出稼ぎ労働者が安心して里帰りできるような国になることを信じている。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)